

【研究ノート】

津軽地方におけるアライグマの分布について

Distribution of Raccoon in the Tsugaru region

¹ 竹内健悟 ² 金 二城

¹ 青森大学 SDG s 研究センター ² 青森大学社会学部

Abstract

The alien species Raccoon was first discovered in the Tsugaru region in 2004, and since then its individuals has become increased and its distribution has expanded. A survey of 14 municipalities in the Tsugaru region revealed that raccoons were found in 112 locations in 11 municipalities, indicating that they are distributed throughout the Tsugaru region. Particularly large numbers were found at the foot of Mt. Iwaki. Among crops, watermelon, corn, and grapes were most frequently damaged. Each municipality has a control plan to capture raccoons, and 150 to 180 raccoons are captured annually. Hirosaki City had the largest number, accounting for nearly half of the total number of raccoons captured. Although most captures were conducted during the crop harvesting season, it was considered necessary to capture all raccoons simultaneously over a wide area in spring, during the calving season, in order to eradicate raccoons.

Keywords; Tsugaru region, distribution expansion, agricultural damage, capture

1. はじめに

アライグマ *Procyon lotor* は北米に生息する食肉目の中型の哺乳動物である。夜行性、雑食性で、生息できる環境は森林、湿地から市街地までと多様である。そのアライグマが、日本各地で野生化して農業被害などを出しており、2005年には「外来生物法」における「特定外来生物」に指定されている。

日本での野生化の始まりとしては、1962年の愛知県犬山市の動物園からの逃亡、1979年の北海道恵庭市での飼育個体の逃亡があげられている(池田 2002)。さらに、1977年にテレビで、アニメ「あらいぐまラスカル」が放映されたことがきっかけでペットブームがおこったものの、発情期を迎えて荒く攻撃的な気性になるアライグマの飼育は難しいために、逃亡や遺棄が頻発したことが分布拡

大の原因として指摘されている(阿部 2011)。

アライグマが野生化して60年近くたった現在、被害が深刻で駆除が最も多いのは北海道である。北海道環境生活部自然環境局のホームページのアライグマ対策によると、アライグマが生息する市町村が道内で1995年には24であったのが、2001年には87、2022年にはほぼ全域の164となっている。2021年度の農作物の被害額はスイートコーン、イチゴなどの1億4千9百万円で、捕獲数は2020年度が25,806頭、2021年度が25,371頭となっている。

アライグマの野生化による影響は農業被害だけではない。人家への侵入による人間生活への直接的被害のほか、アライグマ回虫症や狂犬病の媒介動物であることも問題となっている。また、生態系への影響もあり、ニホンザリガニ *Cambaroides*

japonicus の捕食, アオサギ *Ardea cinerea* のコロニーの消失, フクロウ類の繁殖巣穴の乗っ取りなども起こっている (池田 2000). そのほかにも, 寺社への侵入などによる文化財の破損も懸念されている.

アライグマの生息が青森県で初めて確認されたのは 2004 年である. すでに 20 年近くが経過した現在, 農村部ではアライグマの被害が報告されており, 各市町村による捕獲のための研修会が開かれたり, 駆除が行われたりしている. しかし, 分布がどこまで広がっているのかといった実態が全くわかっていない. そこで, 津軽地方での最近の分布や被害の概要をまとめ, 今後の防除対策や生態系保全の参考とするために調査をしたので, ここに報告する.

2. 調査地・調査方法

アライグマの分布についての初期の情報は発見当時の新聞記事等から, その後の分布拡大については環境省で実施した調査報告からまとめた.

最近の状況について調査の対象としたのは津軽平野周辺と西海岸部の 14 市町村である. 各市町村では「鳥獣被害防止計画」を作成していて, クマ, サル, カラス, アライグマ等の鳥獣による被害や駆除の実態, 対策等が報告されている. これをもとにアライグマに関する基本的な情報を集約し, 傾向を把握した.

ただし, 「鳥獣被害防止計画」は作成年度にバラツキがあり, 各市町村の記録の年度が揃わないため, 最新の情報として 2021 年度 (令和 3 年度) と 2022 年度 (令和 4 年度) について, 以下の内容の情報収集を行なった.

- ①捕獲場所 (集落)・頭数・時期
- ②被害発生地, 被害の内容 (農作物名)
- ③目撃情報のある場所 (過去の目撃場所も含めて)

調査は, 被害や捕獲数が多かった弘前市, つがる市, 鶴田町については担当者への聞き取りを行い, それ以外の市町村にはメールによるアンケートを行なった. ただし, 藤崎町は「鳥獣被害防止計画」を作成しておらず, 情報も無いということで調査対象から外れている.

3. 結果

3-1. 津軽地方でのアライグマの生息の経緯

はじめに, 青森県津軽地方でのアライグマの生息の経緯を見てみる.

津軽地方でアライグマの生息が初めて確認されたのは 2004 年で, 5 月 13 日の陸奥新報で報じられた. 記事の題は「あらっ?! アライグマ!」, 「幹の節穴に親子寄り添う」で, 旧岩木町新法師地区のリンゴ園で, 樹齢 30 年ほどのリンゴの木のフクロウが巣を造る洞をのぞきに行ったら, アライグマの親子を発見したというものである. 続いて, 地元のテレビ放送局もこのアライグマをすぐさま取材し, 「今日はアライグマのユニークな子育てを紹介します」と, ニュース番組で放送しているのを視聴した.

以上の新聞記事とニュースの取り上げ方からは, 他地域でアライグマの農業被害等が問題化していることへの認識がなかったと思われ, 危機感が全く感じられない. さらに, この記事でもう一つ気になったのは, 中南農林事務所林業県産材料振興課のコメントとして「7, 8 年前にも弘前市の市街地でアライグマが発見されたことがあるが, その後管内での報告はなく非常に珍しい」と書かれていることである. これにも危機感や分布の拡大への懸念が全く感じられない.

その 1 週間後の 5 月 21 日, 東奥日報がこのアライグマのことを取り上げた. 記事の題は, 「アライグマ 4 匹捕獲」, 「岩木町のリンゴ園で県」, 「北海道では農作物被害 繁殖 可能性危ぐ」となっている. 記事では, 県自然保護課が農作物や他の野生動物に悪影響を及ぼす恐れがあるとして有害駆除することを決め, 20 日に中南地方農林水産事務所と岩木町役場の職員が, 母親と子ども 3 匹の計 4 匹を捕獲して弘前市の「弥生いこいの広場」に移したことが書かれている. また, 農家による「最初はかわいいと思っていたが, 秋にリンゴを食い荒らされたらたいへん」というコメントも紹介されている.

当初の無邪気とも思える報道から, 1 週間で捕獲に至るこの動きの変化のきっかけになったのは, 野生化したアライグマの生態を研究している北海道大学の池田透氏の助言で, これによって初めて危機感を共有することができたのである.

そして、本県の生物研究者である向山満氏もこのアライグマの野生化に強い危惧を持ち、繁殖の現場や経緯をすぐに調査し、「青森自然誌研究(10) (2005)」に報告している。

その3年後の2007年、環境省が「アライグマ生息情報収集」を行なって、全国のアライグマの生息・分布の報告をしている(環境省自然環境局生物多様性センター 2007)。その報告書では、青森県でのアライグマの生息は弘前市のみとなっていて、生息を記録した地図の5km×5kmメッシュ数も1であった。そのため、この3年間では分布は拡大していなかったといえる。

次に、2018年に環境省で公表した「平成29年度要注意鳥獣(クマ等)生息分布調査報告書 アライグマ・ハクビシン・ヌートリア」(環境省自然環境局生物多様性センター 2018)によると、津軽地方でのアライグマの生息確認は、青森市、弘前市、黒石市、五所川原市、つがる市、深浦町、西目屋村、板柳町、鶴田町の9市町村に増えている。そして、5km×5kmメッシュも青森県全体で56と大幅に増加している。その内訳は、下北地方が1、県南地方が2で、残る53が津軽地方になる。これは最低でも53箇所、近隣で複数生息していればそれ以上の箇所で生息していることを表している。以上から、2007年から2018年までの11年の間に津軽地方でアライグマの分布が拡大したといえる。

青森県農林水産部食の安全安心推進課による

「青森県における野生鳥獣による農作物被害状況(令和3年度)」でアライグマによる被害額の推移を見ると、2017年度は168万円、2018年度は154万円、2019年度は119万円、2020年度は219万円、2021年は333万円となっていて、ここ最近被害が急速に増えていることがわかる。

最初に発見された旧岩木町新法師地区のアライグマは母親と子が捕獲されて移されているが、父親は捕獲されていないため近くで生息し続けたものと推定される。また、新聞記事にあった「弘前市の市街地で発見されたことがある」というコメントや、2018年に公表された環境省の生息確認箇所が下北地方や県南地方に独立した分布箇所があることから、飼育されていた個体の逃亡や遺棄が複数の場所で起こり、方々で野生化が進んでいったことが予想される。

3-2. 被害・捕獲数

各市町村の「鳥獣被害防止計画」に記載された内容に、今回行なった聞き取り調査の結果を加えてアライグマの被害と捕獲の概要をまとめたのが表1である。「鳥獣被害防止計画」は作成年にバラツキがあり記載されていない箇所もあったので、抜けていた年の記録については担当者に追加で情報提供いただいた。

被害を受けた農作物としては、スイカ、トウモロコシ、ブドウが多く、多くの場所で共通していた。とくに、地域の名産となっているつがる市のスイカ

表1 各市町村のアライグマの被害と捕獲の概要

	計画作成年度	対象年度	被害		内容等	捕獲数						計
			被害額			2017	2018	2019	2020	2021	2022	
1	弘前市	2022	2021	310,000	スイカ、トウモロコシ、建物への侵入	92	106	123	75	86	71	553
2	つがる市	2020	2019	685,000	スイカ、トウモロコシ、ブドウ	18	20	17	34	40	51	180
3	鶴田町	2022	2021	1,009,200	ブドウ	25	20	4	18	25	23	115
4	鱒ヶ沢町	2022	2021	13,000	スイカ、トウモロコシ	6	15	14	11	3	5	54
5	五所川原市	2022	2021	1,000	小玉スイカ	3	5	4	5	8	20	45
6	青森市	2022	2020	400	スイカ	1	5	1	8	0	6	21
7	板柳町	2022	2021	0	トウモロコシ、スイカ	0	0	1	6	1	3	11
8	黒石市	2022	2021	0	出没を確認。農業被害を懸念	3	1	0	3	0	0	7
9	田舎館村	2022	2021	0	トウモロコシ	0	3	0	0	1	0	4
10	深浦町	2022	2021	0	過去に野菜とイモ	0	0	0	2	1	0	3
11	西目屋村	2022	2021	0	集落付近で目撃情報。被害を懸念	0	1	0	0	0	0	1
12	平川市	2020	2019	0	今後の被害を懸念	0	0	0	0	0	0	0
13	中泊町	2019	2018	0	近隣で目撃され今後の被害を懸念	0	0	0	0	0	0	0
14	大鰐町	2021	2020	0	町内で生息確認	0	0	0	0	0	0	0
						148	176	164	162	165	179	994



図1 箱罾で捕獲されたアライグマ

(写真提供: 弘前市農林部農村整備課鳥獣対策係)

やメロン、鶴田町のブドウに被害が出ているのは心配である。当初、筆者らはアライグマの発見がリンゴ園であったことから、リンゴへの被害を心配していたが、リンゴの被害は今のところ少ないようである。

各市町村では「鳥獣被害防止計画」のほかに「アライグマ防除実施計画書」も作成し、箱罾による捕獲を実施している(図1)。捕獲は、2月(五所川原市)や4月(鱈ヶ沢町)に行なわれている事例もあったが、被害を受けた農作物の収穫期(6月～9月)に実施されているのが多かった。

2017年から2022年までの6年間の捕獲数は合計994頭で、年ごとに見ると148頭(2017年)から最多の179頭(2022年)まであったが、各年合計はほぼ近い頭数となっていた。

市町村ごとでは、弘前市の合計が553頭と合計の半数以上を占め、続いてつがる市の180頭、鶴田町の115頭、鱈ヶ沢町の54頭、五所川原市の45頭、青森市の21頭などとなっている。また、捕獲数の推移からは捕獲を継続しても容易に減少しない傾向が見られている。

3-3. 生息確認箇所

聞き取り調査から得られた2021年度と2022年度の被害発生地、捕獲地、目撃場所などを、アライグマが分布する場所として図2に示した。2021年度と2022年度に生息記録がなかった市町村でも、それ以前や2023年に出現の確認があった場合は、分布した事実を示すために加えておいた。

なお、場所ごとの捕獲数も合わせて集計したかったが、場所ごとの捕獲数を明確に記録していない市町村もあったため、ここでは場所についての

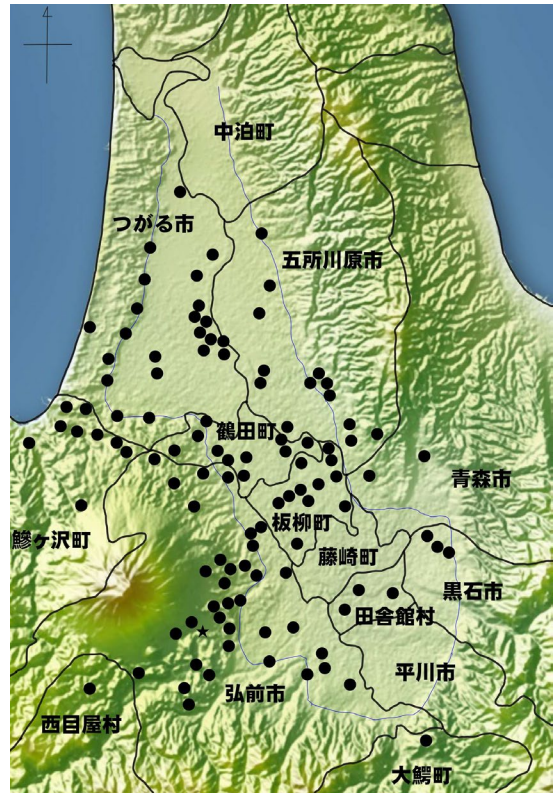


図2 アライグマの分布

- は2021年と2022年に捕獲・被害・目撃のあった集落を表している。
- 一部過去に記録のあった場所も含めている。このほかに深浦町の風合瀬、轟木地区。
- ★は2004年に最初の生息確認があった新法師地区。
- 「imagenavi 青森県地図 14301008」で作成。

み扱い、個体数の多少は反映していない。また、図2では捕獲のあった場所を含む集落の位置を表しているため、畑で捕獲された場合は正確な位置を反映していないことも付言しておく。

図2に示したアライグマの最近の生息確認は11市町村、合計112箇所であった。市町村ごとでは、弘前市が36箇所、つがる市が22箇所、五所川原市が13箇所、板柳町が11箇所、鶴田町が10箇所、鱈ヶ沢町が9箇所などとなっていた。以下に具体的に述べる。

・弘前市 (36箇所)

弘前市では捕獲場所としては岩木山麓が多く、十腰内、笹館、三和、十面沢、大森、檜木、糠坪、高杉、中別所、富栄、細越、宮地、弥生、新岡、宮館、葛原、高岡、百沢、高野、中畑の20箇所とな

っていた。そのほかには隣接する地域として、青女子、前坂、三世寺、紙漉沢、大助、相馬、兼平、熊嶋、悪戸があり、集落が密集する石渡、門外、中野、堀越、川合でも出現が確認されていた。ほか不明が2箇所あった。

2年間の捕獲数が多かった地域としては高杉の25頭、青女子の22頭、十面沢の9頭、前坂の9頭、新岡の8頭、百沢の8頭などがあげられる。

・つがる市 (22箇所)

スイカやメロンの産地である屏風山方面の筒木坂、館岡、菰槌、出来島、丸山、吹原、越水のほか、平地の千代田、菊川、岩木川に近い下車力、穂積、沼崎、出野里、兼館、立花、蓮川、豊田、川除、芦沼、芦屋、そして岩木山麓に近い大館、床舞となっていた。

・五所川原市 (13箇所)

津軽山地南西部に位置する松野木、神山、野里、羽野木沢、前田野目、平野部では長富、水野尾、梅田、毘沙門、持子沢、都市部では栄町、弥生町、他に旧金木地区での確認もあった。

・板柳町 (11箇所)

夕顔関、大俵、五林平、飯田、灰沼、常海橋、五幾形、滝井、赤田、柏木、高増。

・鶴田町 (10箇所)

山側に位置する共栄開拓付近のほか、隣接する廻堰、妙堂崎、間山、大性、平野部では野木、菖蒲川、松倉、沖、瀬良沢。

・鱒ヶ沢町 (9箇所)

北浮田、保木原、湯舟、南浮田、2019年と2020年の記録として、建石、三ツ沢、山田野、小屋敷、長平。

・黒石市 (3箇所)

上十川、上目内沢、飛内

・田舎館村 (3箇所)

豊蒔、大根子、八反田。

・青森市 (2箇所)

吉野田、高屋敷。

・深浦町 (2箇所)

風合瀬、麴木(2020年に捕獲)。

・大鰐町 (1箇所)

蔵館(2023年に捕獲)。

・西目屋村 (1箇所)

最近の記録はなく、2018年に大秋で捕獲された記録があった。

・平川市、大鰐町、中泊町では被害や捕獲が無かったが、生息の確認はあり、今後の被害が懸念されると報告されていた。

3-4. 被害の例

被害の多くは農作物の食害で、とくにスイカ、トウモロコシ、ブドウが多かった。そのほか食害を受けた作物としては、カボチャ、イチゴ、枝豆、エンドウ、キュウリ、トマト、ジャガイモ、リンゴ、サクランボなどがあげられていた。深浦町では牛舎に入り込んでいた事例もあった。

人間にかかわる被害としては、鶴田町で人家の床下への住み着き(親子6頭を捕獲)、五所川原市では倉庫の屋根裏への住み着き(親子5頭を捕獲)、そのほか人家への侵入、風除室への侵入などがあり、特に空き家を巣にする事例があげられた。

また、弘前市教育委員会文化財課の小石川透氏によると、文化財の破損の事例として弘前市の高照神社の随神門の柱への爪痕、軒裏の隙間への侵入の形跡があったということである。

4. 考察

4-1. 分布・生息状況について

アライグマによる被害，捕獲，目撃情報から，2022年の時点では，アライグマは津軽地方のほぼ全域に生息しているといえる．アライグマは山間部から平野部まで広く生息しており，下車力地区を北限としてほぼ全域に分布していた．

アライグマが多く分布していた地域としては岩木山麓があげられ，それに連なるつがる市屏風山方面，鶴田町の廻堰大ため池周辺などの山側の地域も多かった．

一方，平野部では岩木川沿いで目撃が多いほか，田舎館村では水田地帯に設置した罠で捕獲されたことから水田周辺にも生息していることがわかった．さらに，集落や都市部にも入り込んでおり，人家や空き家を巣としていることが明らかになった．

これだけ広範囲に分布していることから，被害や目撃のない地域でも生息している可能性が考えられる．筆者が個人的に知った情報でも，青森市浪岡の樽沢地区での自家消費用のスイカの被害や，弘前市高杉地区の空き家でアライグマを見かけるといった事例がある．今回の調査は市町村の農業関係の鳥獣害対策の担当の方々から伺った情報を元としているが，報告されていない事例があったり，都市部での生息例もあると思われることから，実際の被害数をもっと多く，生息数も分布もより多く高密度になるのではないかと予想される．

池田(2003)によると，当初は個体数が少なく人目にもつかないことから，低密度での繁殖が続く「潜伏期間」があるという．恵庭市と鎌倉市の例では約10年間の潜伏期間があったというので，現在見られない地域，農業被害を確認できていない地域でも，潜伏期間の可能性があるので注意を払う必要がある．

4-2. 対策に向けて

「北海道アライグマ対策基本方針」では，①アライグマによる農業等被害の防止，②健康被害の防止，③生物多様性の保全，の3つの目標を掲げている(阿部2011)．

今回の津軽平野でのアライグマの分布をもと

に，今後の対策のために必要と考えたことを以下に述べておきたい．

4-2-1. アライグマの生態・行動の把握

津軽地方のアライグマの生活史が不明である．スイカに被害をもたらしている個体は，その場所で繁殖して一年中その地に生息しているのか，農作物の収穫期にあわせて移動したり集まったりしているのか，どこで繁殖しているのか等の生態や行動が不明なため，その把握が必要である．そのためには，アライグマの季節的な出没状況についての被害農家への聞き取り調査を行う必要がある．また，可能性としては難しいが，数個体を捕獲してテレメトリによって移動を追跡する方法もある．

あわせて，今回の調査のような被害・捕獲・目撃についてのより詳細で広域的な情報，それも農村部に限らず都市部からも広く情報を集め，全体的な動向を把握することが必要であると考えられる．また，調査ではハクビシン *Paguma larvata* の被害や目撃例についての情報も得られたため，両種あわせて情報収集する必要もあると考えられる．

4-2-2. 根絶に向けた捕獲の実施

現在の捕獲体制は，市町村ごとに収穫期の被害に対応して捕獲を実施しているのがほとんどで，個体数を減少させる効果までは出ていないようである．つまり，一箇所で徹底的に捕獲してアライグマを除去したとしても，他の場所から移動してこられる状態になっている．そこで，根絶に向けて広域的に一斉に捕獲を実施して全体的な個体数の減少を図る取組みが必要ではないだろうか．

阿部(2011)は，「アライグマは，幼獣が立ち立つ前に子育て中のメスを捕獲すれば，巣に残された子どもは生き延びられなくなるとして，幼獣が巣から出て活動を開始する7月以前のメス成獣の捕獲割合を向上させることが重要である」と述べている．そして北海道環境生活部では3月から6月までの「春季捕獲推進期間」を実施している．弘前市のように通年で捕獲を実施できればよいが，せめて予防的な対策として出産期に一斉に捕獲を実施する必要もあるのではないかと考え

る。

また、捕獲後の処分が困難であるという声も聞いた。そこで、処分に当たって市町村や関係機関が協力し合える体制も必要に感じられた。

ただし、農作物被害の実情を見ると、アライグマの食害が増えているとはいえ、クマ、サル、カラスによる被害の方がはるかに甚大で、特にクマの出没への対応には緊急性が伴うため、アライグマのためだけに労力と時間をかけられないという背景があるのも確かである。しかし、根絶に向けた取り組みを実施しないと個体数を減らすことはできず、アライグマの被害は継続し、今後増えていくことが心配される。

4-2-3. 集落や都市部での被害の防止

今回の調査では、建物の床下や屋根裏への住み着き、住居への侵入の例がいくつか見られた。2023年5月16日の朝日新聞には「アライグマ 農業被害拡大」「空き家増加が影響 関東近畿目立つ」という記事が掲載され、都市部での空き家の増加がアライグマの生息域の拡大や頭数増に拍車をかけている可能性が指摘されている。

聞き取り調査からは、人家のみならず、寺社への侵入や破損、畑などにある農作業用の小屋での繁殖などの情報にもふれることができた。北海道では、牛舎などに住み着いたことが酪農地帯での定着につながったという指摘もある。

そのため、アライグマに繁殖場所として利用されないために、都市部においては空き家を見回りするなどの管理、寺社の見回りや侵入を防ぐ対策、農村部では作業小屋・飼育舎のこまめな点検が必要である。人が常駐しない建物は冬越しと春の出産の場として使われる可能性があるため、注意を要する。さらに、津軽地方においては、貴重な歴史的建造物、復元建造物や遺跡が多いので、そのような文化財を守るためにも冬期間の見回りと駆除が必要になると考えられる。

都市部においては、餌が少なくなる冬期間にゴミをあさって住み着く可能性もある。これによって、建造物への被害だけでなく、アライグマ回虫等の病気の媒介動物でもあることから健康被害が発生することも起こりうる。そのため、農業被害がクローズアップされがちであるが、都市部も含

めた社会全体で対策に取り組んでいく必要があると考える。そのような対策の実施は、アライグマだけではなく、カラスなどの防除にも効果があるのではないかと考えられる。

4-2-4 生態系保全のために

もう一つ大事なものは、生態系、生物多様性の保全の問題である。アライグマは雑食性で繁殖力が強く、野生生物へも影響を及ぼしている。北海道では、ニホンザリガニやエゾサンショウウオ *Hynobius retardatus* の捕食が確認されているため、水辺の生態系の攪乱が懸念される。

津軽平野一帯には優れた里地里山環境が広がっており、特に湿原や池沼が貴重な生物の生息地になっている。岩木川のヨシ原では、絶滅危惧種に指定されているオオセッカ *Locustella pryeri*、コジュリン *Emberiza yessoensis*、チュウヒ *Circus spilonotus* などの草原性の鳥類、点在するため池では、絶滅危惧種のカムリカイツブリ *Podiceps cristatus* や近年減少が心配されているカイツブリ *Tachybaptus ruficollis* などが繁殖しているほか、秋から春にかけてはガン類やカモ類などの多くの渡り鳥の中継地、越冬地となっている。津軽平野周辺部の湿地ではニホンザリガニが生息し(奈良岡ほか2001)、昆虫類ではスイカの産地に隣接する屏風山の湖沼群で絶滅危惧種のオオセスジイトトンボ *Cercion plagiolum* が生息するなど、貴重な生物の生息地が多く存在している。

これらの貴重な自然を失わないためにも、アライグマの分布拡大、個体数増加は防がねばならず、社会全体で取り組んでいくべき課題であるといえる。

謝辞

アライグマの分布を調査するにあたり、以下の14市町村の鳥獣害対策担当の方々から情報をご提供いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

弘前市農林部農村整備課鳥獣対策係 齋藤大介氏(写真提供含む)、鶴田町産業課農業振興班 石村林太郎氏、つがる市経済部農林水産課 白戸颯氏、青森市農業政策課農業生産支援チーム 須郷航央氏、五所川原市経済部農林政策課農政係 山

田大智氏, 板柳町産業振興課農政係 山田和茂氏, 鱒ヶ沢町農林水産課環境整備班 尾崎敬一氏, 西目屋村産業課産業係長 西澤彰氏, 田舎館村産業課産業係 日村博文氏, 平川市経済部農林課農地林務係 神山大樹氏, 大鰐町農林課 山田翔太氏, 深浦町農林水産課 笹森公人氏, 中泊町農政課農林基盤整備係 武田響氏, 黒石市農林部農林課 渋谷充輝氏. また, 文化財関係の情報を弘前市教育委員会文化財課小石川透氏からいただきました. 厚く御礼申し上げます.

引用文献

- 阿部豪 (2011) 「アライグマ 有害鳥獣捕獲からの脱却」 山田文雄・池田透・小倉剛編「日本の外来哺乳類—管理戦略と生態系保全」より 東京大学出版会 東京
- 池田透 (2000) 「移入アライグマの管理に向けて」 保全生態学研究 vol.5 159-170
- 池田透 (2002) 「アライグマ ペットが引き起こした惨状」 日本生態学会編「外来種ハンドブック」より 地人書館 東京
- 池田透 (2003) 「アライグマ問題にみる『移入(外来)種』原論」 北海道の自然 No.41 63-66 北海道自然保護協会
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2007) 「平成 18 年度 自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 (アライグマ) 生息情報収集) 業務報告書」
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2018) 「平成 29 年度 要注意鳥獣 (クマ等) 生息分布調査 報告書 アライグマ・ハクビシン・ヌートリア」 奈良岡隆樹・三浦彰仁・野呂幸希・長内大生・成田智之・秋田寛己・対馬孝章・葛西陽介 (2001) 「津軽地域におけるニホンザリガニの生息地」 青森自然誌研究 (6) 89-92
- 向山満 (2005) 「青森県におけるアライグマの記録」 青森自然誌研究 (10) 81

引用・参考データ

- 北海道環境生活部環境局自然環境課. 「アライグマ対策」, 2022, <https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/araiguma/araiguma_top.html> (参照 2023-7-10).

- 青森県農林水産部食の安全安心推進課. 「青森県における野生鳥獣による農作物被害状況」, 2022, <<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/sanzen/Wild-Animals-Damage.html>> (参照 2023-7-10).
- 弘前市. 「弘前市鳥獣被害防止計画」, <<https://www.city.hirosaki.aomori.jp/jouhou/keikaku/files/higaibousikeikakur5-r7.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 黒石市. 「黒石市鳥獣被害防止計画」, 2023, <http://www.city.kuroishi.aomori.jp/shisei/keikaku/files/kuroishisi_tyouzyuuhigaibousikeikaku.pdf> (参照 2023-7-10).
- 平川市. 「平川市鳥獣被害防止計画」, 2021, <<https://www.city.hirakawa.lg.jp/shigoto/keikaku/files/tyoujuuhigaibousikeikaku.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 田舎館村. 「田舎館村鳥獣被害防止計画」, 2023, <<http://www.vill.inakadate.lg.jp/docs/2016110700011/files/inakadatemurachouzyuuhigaibousikeikaku.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 大鰐町. 「大鰐町鳥獣被害防止計画」, 2022, <<http://www.town.owani.lg.jp/index.cfm/6,4441,c,html/4441/20220117-135713.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 西目屋村. 「西目屋村鳥獣被害防止計画」, 2023, <<https://www.nishimeya.jp/material/files/group/6/choujuuhigaibousikeikaku.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 五所川原市. 「五所川原市鳥獣被害防止計画」, 2023, <<https://www.city.goshogawara.lg.jp/shigoto/nousui/files/r5-7tyoujuuhigaibousikeikaku.pdf>> (参照 2023-7-10).
- つがる市. 「つがる市鳥獣被害防止計画」, 2020, <<https://www.city.tsugaru.aomori.jp/material/files/group/20/R3-tyouzyuu.pdf>> (参照 2023-7-10).
- 板柳町. 「板柳町鳥獣被害防止計画」, 2023, <<https://www.town.itayanagi.aomori.jp/info/info-details.php?BunruiID=&id=3654>> (参照 2023-7-10).
- 鶴田町. 「鶴田町鳥獣被害防止計画」, 2023, <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/document/R5_tyojuhigaiboushi.pdf> (参照 2023-7-10).

- 10).
中泊町. 「中泊町鳥獣被害防止計画」, 2020, <<https://www.town.nakadomari.lg.jp/material/files/group/8/20200401-112133.pdf>> (2023-7-10).
青森市. 「青森市鳥獣被害防止計画」, 2023, <<https://www.city.aomori.aomori.jp/nogyo-seisaku/sangyo-koyou/sangyo/nouringyou/nouringyou-info/documents/cyoujyuhigaibousikeikaku.pdf>> (参照 2023-7-10).
鱒ヶ沢町. 「鱒ヶ沢町鳥獣被害防止計画」, 2023, <http://www.town.ajigasawa.lg.jp/sangyo_jigyo/norin_suisan/noringyo/chojuhigaiboshi.files/bousikeikaku2.pdf> (参照 2023-7-10).
深浦町. 「深浦町鳥獣被害防止計画」, 2023, <https://www.town.fukaura.lg.jp/fixed_docs/202303_3100019/file_contents/R5R7tyouzyuuhigaioushikeikaku.pdf> (参照 2023-7-10).

Distribution of Raccoon in the Tsugaru region

¹KENGO Takeuchi ²KIM Yisung

¹ Research Center on Sustainable Development Goals, Aomori University

² Faculty of Sociology, Aomori University

要 旨

外来種のアライグマは、2004年に津軽地方で初めて発見されて以来野生化が進み、分布が拡大している。津軽地方の14の市町村に調査したところ、11市町村112箇所での生息が確認され、津軽地方に広く分布しており、特に多いのは岩木山麓であることがわかった。また、農作物ではスイカ、トウモロコシ、ブドウの被害が多かった。各市町村では防除計画を立ててアライグマを捕獲しており、年間150～180頭を捕獲している。中でも多いのは弘前市で、捕獲数の半数近くを占めていた。捕獲は農作物の収穫期に実施されているが多かったが、アライグマの根絶のためには、出産期の春に広域的に一斉に捕獲する必要があると考えられた。

キーワード : アライグマ, 津軽地方, 分布拡大, 農業被害, 捕獲